

## 加賀藩与力の基礎的考察

著者	小西 昌志
著者別表示	KONISHI Masashi
雑誌名	北陸史学
号	67
ページ	23-54
発行年	2018-12-30
URL	<a href="http://doi.org/10.24517/00060223">http://doi.org/10.24517/00060223</a>



# 加賀藩与力の基礎的考察

小 西 昌 志

## はじめに

近世における与力について、『国史大事典』や江戸時代についての解説書等では、「与力」の語源や発生過程と幕府の与力についての解説のみで、幕府以外の諸藩の与力については、存在しないが如く、全く触れられていない。

これは、与力が下級藩士であり、主要な藩史研究の対象とはならず今日に至った結果ともいえる。しかし、昨今の藩史研究は多様・多角的な視点で進められており、加賀藩研究においても与力を対象とした江森一郎「小立野与力町（金沢市）与力の家系研究」<sup>(1)</sup>や梅田康夫「金沢藩の公事場与力について」<sup>(2)</sup>等の研究がみられるようになった。前者は、明組与力中村豫卿の日記「起止録」<sup>(3)</sup>を解説する前提作業として中村豫卿の人間関係を押さえることを目的とした論文である。各与力家の詳細な情報が網羅されているが、与力の概要のなかで、「本組与力」について「与力の中の与力

という格」と述べるに止まるように、他の与力との違いが明示されていない。後者は法制史の立場から公事場与力の実態について論考している。公事場における実際の仕法業務を遂行する中核部隊「下役人」の多くは与力であることを明確にしたが、与力の説明については「本来の与力である寄親附与力の他、組附与力・遠所附与力・本組与力・明組与力、等の様々な形態があった。」の一文のみで、分析対象の与力がどの与力であるかも触れていない。

一方、加賀藩の職制の視点では、平土が勤める頭分や奉行等は短期間で替わる事例が多く<sup>(4)</sup>、彼らの下で実務役人として勤めていたのが与力であった。また、持弓頭や持筒頭が足輕組を支配しながらも領国鉄炮改奉行等を兼役し<sup>(5)</sup>、また頭交代による不在期間が一・二年もある場合がある<sup>(6)</sup>。こうしたことは、彼らの下で勤めた組附与力の存在により可能であった。また、ほぼ一年ごとに交代する別宮口留<sup>(7)</sup>の下で勤めた別宮附与力が実態として土着・世襲

化していった<sup>⑧</sup>ことも現地の実情を把握していた実務役人であったからである。このように与力は藩の諸場・諸組・諸奉行の下で様々な役を勤めている<sup>⑨</sup>ことから、梅田論文のようにそれぞれその職務内容や勤方の実態を解明し、上役である平士奉行等との関係を明らかにすることは重要である。

しかし、加賀藩の与力研究の現状では、それ以前に「様々な形態」とされる与力がどのように存在し、それぞれの違いは何なのか、平士や歩・陪臣との関係はどうなのか、基礎的なことがほとんど明確にされていない。そこで、本稿では、与力の勤方ではなく、与力の基礎的な存在形態について検討する。そして、その検討に伴い与力の上と下の武士階層、平士や歩・陪臣等との関係にも触ながら、加賀藩下級武士の様相の一端を明らかにしたい。

## 一．与力の分類と構成

### 与力の位置

一〇二万石といわれる加賀藩の藩士数は多く、御歩以上の直臣でも二〇〇人以上である。藩士の身分階層については、「八家」と呼ばれ人持組頭を勤める年寄層<sup>①</sup>を筆

頭に、②人持、③平士、④与力、⑤歩、⑥足輕、⑦中間・小者に大別される<sup>⑩</sup>。これらの構成を数的に確認できる史料は少ないが、富田景周が記した侍帳「帳秘藩臣録」<sup>⑪</sup>には、文化四年（一八〇七）頃の藩士の石高・人名等が御歩まで記されている。足輕については概数として四〇〇〇人としているものの、直臣について加賀藩士の全体的な構成が確認できる貴重な史料である。これによると①八家人、②人持六八人、③平士一二〇二人、④与力二九一人、⑤御歩四三二人、御歩並三九七人、⑥足輕約四〇〇〇人である。与力以下を加賀藩の下級武士とするならば、下級武士の中で最も数が少ない階層の武士である。また、与力の割合は、足輕を除けば約二・一%、足輕を含めば約四・五%で、八家・人持という藩最上層を除いては最も少数階層でもある。文化四年の与力は二九一人であるが、それ以前の寛延三年（一七五〇）の与力は二三三人であった<sup>⑫</sup>。約五〇年で六〇人の増加については、全体の変化が確認できないので評価できないが、寛延三年時点でも与力が文化三年と同様少数階層であったことは、想像に難くない。なお、安政く文久頃の侍帳<sup>⑬</sup>では、文化四年・寛延三年の史料ほど正確性は期待できないものの与力数は二七〇人である。少数階層であるが幕末には二八〇人前後の与力が存在した

と考えられる。

与力は下級武士の少数階層である一方、他の階層との区別の基準としては、①直臣である、②藩主に御目見ができない<sup>(14)</sup>、③知行(石)取りである、④一国平均免<sup>(15)</sup>が一步落ち(下免)である、といった四点が挙げられる。①については、後述する「寄親附与力」は陪臣との関係が深い、直臣である。②は与力以下の階層の特徴であるが、召出や知行引足の時は藩主への御礼として御目見がある<sup>(16)</sup>。③は与力以上(一部の平士並等を除く)の階層の特徴で、与力以下の歩や算用者は俵取りで、小頭になると知行取りとなるが、与力には俵取りはいない。④については、万治二年(一六五九)六月朔日の御定<sup>(17)</sup>に「加州三ツ五歩・越中・能州四ツ物成与力江遣候」とあり、知行(石)取りではあるが平士に比べ、知行高に対する実収納高の割合(免)が一步低い。この一步低い下免は与力だけではなく御医者・御儒者等もそうである<sup>(18)</sup>。与力そのものを示す一基準はないが、与力であればこれらを満たしており、与力が諸階層の中間的な存在であることが窺える。

## 与力の分類と概要

史料用語として様々な与力が出てくるが、ここではそれ

らの与力の詳細には触れず、与力の概要を理解するのに必要な範囲にとどめ、詳細は次章以降で述べることにする。

与力については、一般的に侍帳等において、「寄親附与力」・「組附与力」・「本組与力」・「明組与力」・「遠所附与力」の五つに分けられ記されることが多い。これは、湯浅祇庸が「藩国官職通考」<sup>(19)</sup>において与力裁許(寺社奉行の兼職)の項に附した与力の座列でもある。但し、本組与力と明組与力の座列については同石高の場合は本組与力が先列となることが記されているが、座列における与力の種類であつて、湯浅は、座列とは関係なく与力の種類としては「七品」ともしている。残る二種の与力は、「自分仕与力」と「加領本組与力」であるが、座列では前者は寄親附与力に、後者は本組与力に含めている。そして寄親附から明組、明組から組附等は流動的で、本組については組附になっても本組であると記すなど、与力の本質的な分類としては使用しがたい。

そこで本章では、与力は知行取りでありながら、知行の面において異なる与力が存在することに注目し、先は知行で分類することにする。知行による分類は大きく二つあり、一つは寄親附与力とその他の与力を分けるもの、もう一つは本組与力とその他の与力を分けるものである。前

者は、知行取りである与力の知行が何処から出されているかである。寄親附与力の場合には、大身の藩士の石高（本高＋与力知）の与力知から出されているため、知行は寄親の宛行状に含まれ、各与力の知行所附は寺社奉行から寄親宛てに出されている<sup>(20)</sup>。その他の与力、本組与力は藩主からの知行宛行状および算用場からの仮所附が出され、組附・明組与力は算用場からの仮所附のみが出される<sup>(21)</sup>が、いずれも平士と同じように給人知行地として藩から出されている。

後者については、与力の知行が家についたもの（家督）か、個人についたもの（個人知）かである。本組与力の知行は平士と同じく家督相続が認められた知行であり、その他の与力は個人知であり嫡子等への相続は出来ない<sup>(22)</sup>。

本組与力以外の与力で実態として相続しているように見える事例も多いが、それは相続ではなく親から嫡子への「指替」の慣例化である。従って本組与力の場合、嫡子が幼少であっても知行高の「三ノ一」で相続が認められるが、その他の与力の場合は相続できないため養子をとって指替るか、名跡として他者が与力として召し出されることになる。一方個人知であるために親子二人共に与力であることも可能で、このような形態は俵取りの歩（並）や足輕と同様で

ある。なお、勤功等による知行加増の文言について、家督の場合には「加増」であるが、個人知の場合は「引足」と区別して使われている<sup>(23)</sup>。

以上、知行から与力を分類すれば本組与力・寄親附与力・その他与力（明組与力および本組与力を除いた組附与力）の三種類に分けられる。後述するが寄親附与力・その他与力共に勤方が評価されれば本組与力への道が開かれ、本組与力もまた勤方により平士（組外）への道が開かれている。なお、明組与力は寄親附与力が事情により寄親の与力知から知行が与えられなくなった与力で、組附与力ではない与力のことである。

組附与力については、定番頭支配の定番馬廻・御歩組、持筒大組頭支配の大組、持弓頭支配の持弓組、持筒頭支配の持筒組、金沢留守居番支配の留守居組の各組に付けられた与力で、与力の勤方の一つともいえる。そのため本組与力は勤方として組附与力を勤めることはあるが、戦時の配備関係を想定しているためか寄親附与力は勤方として組附与力になることはない<sup>(24)</sup>。また、寛延三年（一七五〇）与力侍帳<sup>(25)</sup>では、明組与力の中に「土肥故庄兵衛跡組附」等の「跡組附」や「元組附」の与力が含まれている。勤方としては組附与力であるが支配頭が死亡もしくは異動によ

り次の支配頭が不在であることから、支配関係としては組頭附ではないので「明組」与力とされているのである。

遠所附与力については、新川郡境・能美郡別宮の領境に配された境附与力・別宮附与力と人持組から主に任命される魚津在住・今石動在住支配下に附けられた与力の総称で、当初は境附与力と別宮附与力のみが「遠所附」と称されるなど通称的な与力呼称である。

### 与力の構成と変化

では、与力の全体像が確認できる寛延三年（一七五〇）と文化四年（一八〇七）の侍帳により、本組・寄親附・その他与力の構成や、その間約六〇年の変化等について確認していくことにする。第1表は両年の与力を石高や人数に關してまとめた表である。両年を比較しつつ概観すると、与力の約六割は寄親附与力で本組・その他与力はほぼ同数（約二割）である。全体人数は約六〇年間で五七人の増加であるが、その内四九人は寄親附与力の増加であるため、構成比率としては本組・その他与力の割合は少し下がっている。一人当たりの平均石高は寛延三年では①寄親附一四六石、②本組一三〇石、③その他一〇九石、文化四年では①一三七石、②一三四石、③一〇四石で、寄親附与力の平

均石高が最も高く、本組、その他与力と続くのは両年とも変わらないが、文化四年では寄親附とその他与力が平均石高を落とす一方、本組与力の石高が上がっている。

石高の幅では寛延三年は五〇〇石、文化四年では五〇〇石、文化四年では五〇〇石であり、時代が下るにつれて高禄の与力が消滅および減少していることが確認できる。石高の分布では、両年とも一〇〇石（約四〇％）、一五〇石（約二五％）、二〇〇石（約七・五％）に分布の山がみられる。いずれも多数を占める寄親附与力の傾向を反映している。本組与力は一〇〇石、一五〇石に分布の山が見られ、その間も約二〇％確認でき、一〇〇〇石に七、八割が集中している。その他与力では一〇〇石が半数以上を占め主体で、一五〇石と一〇〇石未満に定量確認できる。寛延三年には一五〇石層が約二三％であったが、文化四年では半減し、その分は一〇〇石層が増加している。また、一〇〇石未満は、その多くは境附与力等土着性が高い与力である。なお、幕末の状況<sup>26</sup>については、史料の正確性は低いが、傾向として、石高分布の山は変わらないが、寄親附・本組与力ともに一〇〇石の割合が高くなり、その他与力は一〇〇石未満の割合が増えている。そのため平均石高もやや低くなっている。

表 1－② 寛延 3 年(1750)の与力石高分布

石高	全体	寄親附	本組	その他
50	1 (0.43)			1 (1.92)
60	1 (0.43)			1 (1.92)
70	8 (3.43)			8 (15.38)
80	4 (1.72)	1 (0.75)	3 (6.25)	
100	100 (42.92)	54 (40.60)	18 (37.50)	28 (53.85)
110	1 (0.43)		1 (2.08)	
120	10 (4.29)	7 (5.26)	3 (6.25)	
130	13 (5.58)	8 (6.02)	5 (10.42)	
140	2 (0.86)	1 (0.75)	1 (2.08)	
150	60 (25.75)	36 (27.07)	12 (25.00)	12 (23.08)
160				
170	2 (0.86)	2 (1.50)		
180				
200	17 (7.30)	12 (9.02)	3 (6.25)	2 (3.85)
250	6 (2.58)	5 (3.76)	1 (2.08)	
300	4 (1.72)	3 (2.26)	1 (2.08)	
330				
350	1 (0.43)	1 (0.75)		
360	1 (0.43)	1 (0.75)		
400	1 (0.43)	1 (0.75)		
500	1 (0.43)	1 (0.75)		
計	233 人 (%)	133 人 (%)	48 人 (%)	52 人 (%)

表 1－① 各与力の人数と石高

		人数	石高	平均
寛 延 三 年	寄親附	133 57.08%	19400 61.94%	145.9
	本組	48 20.60%	6250 19.96%	130.2
	その他	52 22.32%	5670 18.10%	109.0
	計	233 人	31320 石	134.4
文 化 四 年	寄親附	182 62.76%	24980 66.07%	137.3
	本組	53 18.28%	7100 18.78%	134.0
	その他	55 18.97%	5730 15.15%	104.2
	計	290 人	37810 石	130.4
幕 末	寄親附	172 63.70%	23380 67.44%	135.9
	本組	58 21.48%	7290 21.03%	125.7
	その他	40 14.81%	4000 11.54%	100.0
	計	270 人	34670 石	128.4

※寛延 3 年は「惣与力人数知行高并明知役付歳付等之帳」（加越能文庫 16. 30-96）より作成。本稿では「寛延三年与力侍帳」と表記している史料。

文化 4 年は「帳秘藩臣録」（加越能文庫 16. 30-50）より作成。

幕末は「士帳」（加越能文庫 16. 30-54）より作成。年代は安政～文久（1860 年頃）である。

表 1－③ 文化 4 年(1807)の与力石高分布

石高	全体	寄親附	本組	その他
50	1 (0.34)			1 (1.82)
60	2 (0.69)	1 (0.55)	1 (1.89)	
70	9 (3.10)		2 (3.77)	7 (12.73)
80	3 (1.03)	1 (0.55)	2 (3.77)	
100	118 (40.69)	68 (37.36)	13 (24.53)	37 (67.27)
110				
120	14 (4.83)	8 (4.40)	6 (11.32)	
130	26 (8.97)	16 (8.79)	7 (13.21)	3 (5.45)
140	4 (1.38)	3 (1.65)	1 (1.89)	
150	72 (24.83)	53 (29.12)	13 (24.53)	6 (10.91)
160	1 (0.34)	1 (0.55)		
170	4 (1.38)	4 (2.20)		
180	6 (2.07)	3 (1.65)	3 (5.66)	
200	22 (7.59)	18 (9.89)	3 (5.66)	1 (1.82)
250	5 (1.72)	4 (2.20)	1 (1.89)	
300	1 (0.34)	1 (0.55)		
330	1 (0.34)		1 (1.89)	
350	1 (0.34)	1 (0.55)		
計	290 人 (%)	182 人 (%)	53 人 (%)	55 人 (%)

以上、与力の石高は一〇〇石から一五〇石で約八割を占め、その主体は寄親附与力である。時期が降るにつれ与力は増加する一方、高禄の与力は消滅・減少する傾向がみられる。寛延三年から文化四年の与力五七人の増加については高禄与力の分解のみではなく、与力石高総計においても約六五〇〇石増加している。この増加のほとんどは寄親附与力であるため、この増加分のほとんどの石高は与力知らずに出されていることになる。

## 与力知行の財源

寄親附与力の知行は与力知から賄われているが、本組与力には知行宛行状、その他の与力については算用場からの仮所附が出されている。その知行が寄親に付けられた与力明知で賄われているのか、与力知とは別の知行で賄われているのかについて確認しておく。なお、与力知明知とは大身の藩士に付けられた与力知の内、寄親附与力の知行に充てられた残りの知行のことで、史料上は「明知」と記される。

寛延三年（一七五〇）与力侍帳の末には、

総知行高七万四千九百八拾石 ①  
内 三万四千四百九拾石 在与力知 ②

三万五千三百四拾石 明知 ③

八千百五拾石 御預知并明知・同心知共 ④

とある。②は全与力の総石高（表1では三三三二〇石、③は寛延三年時に寄親附与力を抱えている各寄親の明知（与力知＋与力石高）の合計、④は寛延三年時に寄親附与力を抱えていない寄親の与力知（＝明知）の計と同心知（計一

六〇〇石）の合計である。なお、「御預知」と記された藩士家については、文化四年の侍帳にも与力が確認できないことから、与力を付けられたことが無い、もしくは附けない名目上藩士家に預けた与力知と考えられる。また、同心知は貞享四年（一六八七）に横山筑後家（一万石内二〇〇石与力知、一〇〇〇石同心知）と多賀信濃家（六〇〇〇石内与力知一四〇〇石、同心知六〇〇石）のみに付けられた同心足輕組を抱えるために与えられた知行である<sup>27)</sup>。

大身の藩士に付けられた与力知の明知総高（③＋④＝一六〇〇石）は、寄親附与力の総石高よりも悠に多く、本組与力やその他与力を含めた総石高（②）以上であり、与力知で全与力の石高を軽く賄える状況である。

しかし、①の総知行高七四九八〇石（同心知を除くと七三三八〇石）は、与力知の総計六二二五〇石より約一〇〇〇石多い。この点について文化四年（一八〇七）<sup>28)</sup>と文政二年（一八一九）の状況を併せ（表2）考えてみる。文化四年の場合をみると、石取り藩士の総知行を約八四二〇〇石とし、「内、千六百石同心知、六万七千七百九十石惣与力知高、内当時在与力等高二万五千三百三十石」としている。なお、この「当時在与力等高」は寄親附与力の総高（表1では二四九八〇石）であり、明知総高は三六四六〇石、



表2 与力関連各総高比較表

単位：石

寛延3年	総知行高 ①	在与力知 ②	明知 ③	預知并 同心知④	(与力知の 総計)	(寄親附与力 の総知行)
	74980	31490 (31320)	35340	8150	(62250)	(19400)
文化4年		(37810)	(36460)		61790	25330 (24980)
文政2年	禄額	在与力禄	定額			
	76320	37610	36210			

寛延3年は「惣与力人数知行高并明知役付歳付等之帳」（加越能文庫 16.30-96）、文化4年は「帳秘藩臣録」（加越能文庫 16.30-50）、文政2年は「金龍公記史料」（『加賀藩史料』）より作成。なお、（ ）は筆者の統計による数値である。

本組与力等を含めた全与力の総石高は三七八一〇石（寛延三年②三一三二〇石）である。寄親与力知の総計六一七九〇石は寛延三年の六二二五〇石とほぼ同高で、全与力の石高は前述の通り増えているが、ここでは寛延三年の「総知行高」（①）に相当する高は記されていない。

文政二年の「金龍公記史料」<sup>(29)</sup>には「当春与力惣帳之表人員二百八十八人、禄額七万六千三百二十石、内三万七千六百十石現在与力禄、三万六千二百十石定額、九百石預知、千六百石同心知」と記されている。「与力禄」は、文化三年の数値から全与力の総石高であり、「定額」も文化三年の数値から考えると明知総高と考

えられる。そうすると「禄額」は寛延三年の「総知行高」約七四九八〇石と近似し、同意と考えられる。個別に与力知（并預知）を集計すると約六二〇〇〇石（文化四年も同程度）であることを考えると、大身の藩士に附けられた与力知の合計以外に一万石程度は与力に関する何らかの高が含まれていることになる。これは寄親附与力以外の与力の知行高計が約一二〇〇〇石であることから、彼らの知行を賄うためのものと考えられる。つまり「禄額」も寛延三年の「総知行高」も与力知の総計ではなく与力に関わる高の総計であり、本組与力やその他与力の知行は、寄親の与力知の明知で賄われているのではなく、別途確保されていたのである。

## 二. 利常期までの与力

本章では、与力の分類や構成、知行等について述べたが、本章ではそのような与力はいつから、どのように存在していたのか、加賀藩における与力の成立について考えてみたい。

先は加賀前田家三代利常までの与力について確認する。利常は寛永一六年（一六三九）に嫡子光高に家督を譲り小

松へ隠居する。ところが光高は正保二年（一六四五）に急逝し、当時三才の綱紀が家督を嗣ぎ、祖父である利常が綱紀後見となり、万治元年（一六五八）に六六才で亡くなっている。従って、ここでは万治元年以前の与力を対象とする。

この時期の与力に関する史料はほとんど確認できないが、「与力方御親翰等之控」<sup>30</sup>からこの時期の与力の様子を窺うことができる。同史料は元禄十一年（一六九八）から享保五年（一七二〇）までの、主に与力の任免に関して、与力支配頭の願出を年寄がまとめ藩主綱紀に伺い、綱紀の指示や結果を記した史料である。その中には与力の由緒、先祖に関する記載もあり、そこから万治以前の与力について検討する。

### 利家・利長期の与力

与力の本来的な姿とされる寄親附与力は、利常以降は明確にその存在が確認できる。それ以前、加賀前田家初代利家・二代利長の頃については明確ではないが、与力の初源を窺わせる記述が二種、同史料の由緒書等の中に窺うことができる。

明組与力川口八郎兵衛の祖父久左衛門は、柴田勝家の家

臣であつた。前田利長松任在城の頃に馬廻組三〇〇石で召し出されたが「人持へ御馬廻御附被成候時分、人持三輪法受到に附けられる。その後天正一八年（一五九〇）の八王子攻で功を上げたため、年老いては料五〇石で隠居が認められた。家督三〇〇石については倅久左衛門に「無相違被仰附、三輪作藏与力ニ被仰付」、久左衛門は慶安二年（一六四九）に亡くなっている。利長が松任四万石を与えられたのが天正一一年、その後天正一八年までの間に「人持へ御馬廻御附被成」れたが、その代替わりには、附けられた人持の「与力」を命ぜられたのである。

同じく、利長が松任で馬廻組に召し出した二宮五右衛門（四五〇石）も八王子攻の時、人持青山佐渡に附けられている。その後青山佐渡が魚津城預りになったとき「御昵近之内被相添可被下旨奉願候处、筋目有之者共二付寺西兵部・稻垣与三左衛門・二宮五右衛門等被遣候」と記されている。「昵近」（平土）を附けられることを願い、「筋目有之者」が附けられたのであるが、昵近であるかは明確ではない。しかし、二宮五右衛門はその後慶長五年の大聖寺攻には青山豊後に従い、青山豊後が魚津城預りから金沢へ帰り、元和八年（一六二二）に亡くなったとき、五右衛門は利常と呼ばれ「先知四百五十石之御判物御改被下之、御馬廻組

二被仰付」、寛永五年に亡くなっている。つまり、天正一八年青山佐渡に附けられたときから元和八年改めて馬廻組となるまでは「昵近」ではなく、もちろん陪臣でもなかったと考えられる。

これら川口・二宮の事例から、「人持へ御馬廻御附」られた時点から初源的な「与力」形態の一つであつたことが考えられる。なお、二宮五右衛門の子は寛永五年に馬廻として召し出されるが後に青山将監の与力となっている。

もう一つは、元禄一〇年（一六九七）奥村伊予有輝が自身の寄親附与力の祖先について、文禄年中前田利家に召し出された坂井治部・味岡源七郎・加藤長助・荒木隼人が「其後、私高祖父河内守射手与力被仰付、於浅井表弓仕、従瑞龍院様御褒美被下」と記している。「浅井表」は慶長五年（一六〇〇）浅井嘯の戦いのことであることから、前田利家に召し出され、慶長五年以前に「射手与力」として奥村栄明に附けられたことになる<sup>31</sup>。「射手与力」については、貞享三年（一六八六）小幡宮内の与力となった中西伝右衛門の祖父市兵衛について「瑞龍院様御代、石野故讃岐射手与力ニ被召出」、慶長一九年に「御昵近ニ被仰付」、利常から知行宛行状も頂戴していたが（然処、同（元和）九年（一六二三）小幡故宮内与力ニ被仰付」、寛永四年（一六二七）

に亡くなったと記している。利長代に「射手与力」となり、後一旦は平士となったが最後は寄親附与力になったことが記されている。このことから「射手与力」も平士ではなく、加賀藩における戦時における部隊編成としての与力ではあるが、後の与力に繋がる初源的な与力形態の一つであつたと考えられる。

### 利常期の与力

利常の代においても、平士が人持等に附けられ、後に与力となる事例が確認できる。永原土佐孝治（七〇〇〇石）の家臣日置小右衛門（二〇〇石）について、土佐の三男で分家となる権大夫孝好が利常の近習となった時の事を、権大夫の子永原主税は「（日置）故小右衛門義、寛永十七年新知御改式百石被下御一行頂戴仕候、故権大夫御近習相勤申内御附被成候、其以後故権大夫御加増知拝領仕候節、与力知へ御加被成候」と記している。利常は寛永十七年日置小右衛門を陪臣から改めて平士として召出し、権大夫に附けたのである。由緒帳<sup>32</sup>によると、権大夫は加増および父土佐の隠居による配知により慶安二年（一六四九）三〇〇〇石となった時点で与力知三五〇石が附けられている。その時に小右衛門は権大夫の与力となったのである。

利常期には与力に召し出された事例は多い。元和期に与力となった事例では、「石野故讃岐射手与力」であった中西市兵衛が昵近となった後、元和九年（一六二三）に小幡故宮内の与力になっている。寛永期では、尾崎九兵衛が寛永八年葛巻隼人与力に、鍋木清兵衛が寛永九年沢田治左衛門与力に召し出されている。日置小右衛門は利常期において陪臣から平士を経て与力となった事例であり、その他陪臣から与力、平士（以前は明確ではない）から与力に召し出される事例等が確認できる。

利常期には陪臣から与力となる事例が多く確認できるが、その中に与力の存在形態について窺わせる事例があり、この期の特徴として確認しておく。

松平玄蕃の陪臣柳橋彦進が与力となる経緯について「承応二年（一六五三）、故玄蕃へ遺蹟相続被仰付候刻、家老分之者三人、從微妙院様故玄蕃与力被仰付候、其砌三人共種々御断申上候処、跡目無相違可被仰付之旨、竹田市三郎を以被仰渡、則微妙院様御判之物頂戴」と記されている。松平家の家老（陪臣）を松平家の相続時に利常は与力に召し出そうとしたが、柳橋等家老分は断る。しかし、跡目（家督相続）を認める条件により与力となったのである。つまり、

利常期の頃から与力は基本的には相続が認められない直臣であった可能性、もしくは、当時はまだどの藩士であろうと跡目が保証されていないことによるのかはともかく、条件を提示しながらも利常は与力を増加させようとしていたことが窺える。

奥野主馬佐（五千石）の二男市郎右衛門が配分五〇〇石を承け、その内二〇〇石が与力知であった（<sup>33</sup>）。その時の記載には「寛永二十一年二微妙院様御墨附市郎右衛門致頂戴候、右之御判物ニ主馬佐給人之内、辻治兵衛・村上又右衛門両人百石宛被下、与力ニ被仰付旨御文言被遊、則被召出候」と記されている。父の陪臣を分家の与力にした事例であるが、奥野市郎右衛門の与力知が二〇〇石に対して与力の知行高計が同石高である。先述したが、寛延三年（一七五〇）の寄親の与力知と寄親与力知行高計とは前者の方が大きい。これは後述するが綱紀期における与力の整備によるものである。ともあれ、利常期は寄親の与力知と寄親与力知行高計とは一致していた。このことは、寛永二〇年に加賀藩に召し出された前田主膳（大膳寄孝）の知行三千石の内千石が与力知（<sup>34</sup>）で、与力として附けられたのは七人、その知行高計は与力知と同じ千石（<sup>35</sup>）であったことから

らも確認できる。また、「与力知」について、管見の限り由緒帳では奥村因幡易英が寛永四年に父快心隠居料の一部を拝領し合わせて一四四五〇石になり、内一五〇石が「与力知」であるとの記載<sup>(36)</sup>が最も古い。

また、与力の種類に関して、竹田市三郎（三五三〇石）の与力岡本三右衛門（二〇〇石）について「微妙院様御代正保二年、市三郎自分仕与力ニ被仰付、江戸等へも召連、市三郎死後私与力ニ被仰付、万治二年ヨリ公義御用相勤」と市三郎嫡子竹田五郎左衛門が記している。正保二年（一六四五）から市三郎の「自分仕与力」となり、利常没の翌年万治二年（一六五九）から「公義御用相勤」めたことが確認できる。同様の事例としては、品川蔵人与力小島九右衛門は正保二年今枝民部直恒の与力として召し出され、慶安四年に利常が九右衛門を品川蔵人の父左門に付けた時に、「自分ニ召仕候、私江亡父遺知被仰付候砌、惣与力並御預被為成、御用相勤」たと蔵人が記している。「自分仕与力」や「自分与力」の表記は寄親附与力の一形態として幕末まで確認できる。竹田五郎左衛門が記したのは元禄一〇年（一六九七）、品川蔵人が記したのは元禄一一年であるので「自分仕与力」が利常期の表現であったかは定かではないが、利常期から寄親附与力には、寄親に陪臣の如く召し仕える

「自分仕与力」と「公義（藩）御用」を勤める「惣与力並御預」りする与力が存在していたことが確認できる。なお、今枝民部直恒の由緒書<sup>(37)</sup>には「都合老万式千五百石、内五百石自分仕与力知被仰付、慶安四年十二月十七日於江戸表死去仕候」とあり、慶安四年以前の与力知が「自分仕与力知」であったことから、小島九右衛門は今枝直恒の「自分仕与力」で、直恒没後品川蔵人の「自分仕与力」に附けられたのである。

寄親附与力と寄親の関係は、寄親に付けられた与力知から知行が出される関係である。「自分仕与力」は寄親の家臣と同じく寄親に仕えるが、「惣与力並御預」与力は藩の御用を勤める与力で、藩主から寄親に預けた状況でもある。しかし、寄親の与力知から知行が出されていることからいずれも寄親の「家来同事」<sup>(38)</sup>であったと考えられる。

その他、明組与力、別宮附与力、魚津与力についても利常期にその存在が確認できる。富田越後の家来であった川島弥三郎は、「越後死去仕候後、正保元年微妙院様へ被召出、御知行式百石被下置、明組ニ而罷在、其後小幡下野与力ニ被仰付、（中略）万治元年是空<sup>(病也)</sup>与力ニ被仰付」られ公事場附定役を勤めている。富田越後重次は正保二年一六才で亡く

なり、利常は奥野主馬の嫡子重持をして一才で富田家を嗣がせた<sup>(39)</sup>。川島弥三郎は陪臣から与力となったものの寄親は富田家とはならず、小幡下野の与力となるまで「明組」であった。この由緒については正徳二年（一七一二）の記載であることから、「明組」は当時の表現であったかは定かではないが、寄親に附かない与力も利常は召出していたことが窺える。

別宮附与力について、西沢伝兵衛の由緒では「微妙院様御代寛永十六年前田刑部与力ニ被召出、御知行五拾石被下置、別宮ニ被指置御用相勤候」とあり、利常期の別宮附与力は寄親附与力の形態をとっていたことがわかる。魚津与力について、寛永四年馬廻組一五〇石を嗣いだ竹村伊兵衛は、「寛永拾四年為御加増五十石、先知合貳百石拝領仕、大音主馬与力ニ被仰付、越中魚津へ罷越御用品々相勤候」と記している。大音主馬好次は、魚津在住であった父主馬が寛永一三年に亡くなった後、魚津在住となり魚津に引越している。その時に竹村が与力として附けられ魚津に引越し、大音好次が金沢に帰ったとき一緒に帰っている。直臣を加増して与力にする事例でもあるが、魚津与力も寄親附与力であった。

以上、利常期までの与力についてみてきたが、利常は、平士・陪臣を大身の代替わり・加増時に与力知を付け、それを契機に寄親附与力として創出していったのである。与力知と与力の石高は一致し、寄親附与力には、寄親の陪臣の如く仕える自分仕与力と藩の勤をする与力が存在し、寄親の代替わり時には、寄親が替わる場合もあり、タイミングにより明組となる与力も存在していた。また、別宮与力や魚津与力も寄親附与力で勤めさせていた。利常の与力創出の意図は史料では確認できないが、利常期は大坂の陣の後、加賀藩政の成り立ちのため様々な制度や改革を進めていった。「加賀藩の寛永改革」<sup>(40)</sup>や改作法、城下の整備など課題は山積し、実務も膨大化したことは想像に難くない。そこに実務を専らとする与力を充てるに当たり、戦時における部隊編成としての与力の形態を援用し、大身に与力知を附ける方式で制度化していったのである。

### 三、綱紀期における与力の整備とその後の与力

前田家五代綱紀は、利常が進めた改作法を始め様々な国政に関し整備をおこなったが、職制の整備もその一つであった。いわゆる「貞享の職制改革」は年寄・人持組頭（八

家」の整備<sup>(4)</sup>であり、平士の支配に関する頭分等の整備は延宝期から徐々に始まっていたことが親翰写<sup>(42)</sup>等から確認できる。

### 寄親附与力の整備

与力の御定で確認できる最初は、万治二年（一六五九）六月朔日の御定<sup>(43)</sup>である。

#### 【史料一】

与力知、寄親知行物成同事被下候間、内加州三ツ五歩、越中・能州四ツ物成与力江遣候、其上之免ハ寄親に被下候、明知同前之事（a）  
一、与力明知代官、与力之内見計申付、可為致裁許事（b）

一、明知分免帳、寄親より調、両人加奥書、明知代官可相渡事（c）  
一、与力之者、对寄親不屈之仕合有之、扶持を放、并死去人欠人代召置候儀、寄親より両人ニ断、聞届可致差図事（d）  
一、組付無之与力候ハバ、明知有之寄親江以圖取、早々可付事（e）  
一、与力知千石以上、拾ヶ一程明知ニ可仕置事（f）

一、与力死去跡知行收納之儀、御昵近之面々御定同断之事  
一、新参ニ被召出与力、正月より六月迄ハ其年之物成不残被下候、七月以後は半物成可被下事  
右、被仰出之通、無相違可有裁許者也

御印

万治貳年六月朔日

今枝民部  
津田玄蕃  
奥村因幡  
前田対馬

横山式部殿  
篠原織部殿

史料一の（a）は、寄親与力の与力知について、改作法に伴い明暦二年（一六五六）に導入された一国平均免（加州三ツ六歩、越中・能州四ツ一歩）との関係を明確にしたものである。ここで与力の実収率（免）が一步低いことが明確化され幕末まで続く。一方与力知については、寄親の知行に含めて下され、「其上之免ハ寄親に被下候」とあることから、寄親の免と与力の免の差（一步）が明知も含めて寄親の収入となることを示している。

そして、以下の七項の内四項に「明知代官」等「明知」

の文言が確認できることから、万治二年の御定以前に「明知」に関する問題があったことが窺える。先述した利常期の与力知には原則「明知」は無いはずであるが、実態として寄親の交代など「明組与力」が出てくる一方、「明知」も生じたことが考えられる。そして（b）（c）ではその明知における収納実務を与力（明知代官）にさせ、（e）の「組付無之与力」（明組）を明知ある寄親に付けて寄親附与力として解消しようとしたのである。（f）は寄親に附けられた与力知が千石以上の場合について「拾ヶ一程明知ニ可仕置事」とあり、全ての与力知を与力の知行に充てず、明知を設ける様に指示しているが、（e）との関連で考えると、一〇〇石以上の明知ができることから、明組与力の解消がその目的であったと考えられる。

この明知高について与力知との関係（例えば与力知一〇〇〜一四〇〇石の明知も一〇〇石である等）を明示したのは「巳三月廿六日」の御定<sup>44</sup>である。この巳年の御定については明知の条の前に「一、自分ニ承立召抱候与力知行高之事」があり「別紙覚書のこく預置与力知行高之三分一也」とある。この「別紙覚書」には、整備を始めた寄親与力についての綱紀の様々な指示や規定が以下のように記

されている。

## 【史料二】

### 覚

一、家中侍中之子弟、或伯叔父、或従兄弟、或侄<sup>50</sup>、或孫、此等と与力ニ出度之旨願候者ハ、向後何茂手前迄頭々より可相達置候、然ハ毎年可及聴事

一、与力知行高之内三ノ一者何連ニ而茂寄親存寄之者書付之、何茂手前迄可及相談候、尤件之断有之節者得内意、其上を以可申渡事（a）

一、与力一人之知行高、向後ハ大概百石たるへし、然共与力知行高多者ハ、或百五十石、或ハ貳百石、或貳百五十石、或三百石、応其高少々可雜之、但三百石を与力知之限とすへき事

附、有子細奉公人、又ハ由緒有之知行減少難仕者ハ各別之事

一、与力之義、寄親心得を以不可加増候、其故有之時分ハ必得内意可及其沙汰事

附、加増遣候者ハ知行高ハなつむへからさる事  
一、自分ニ召仕候与力之義、前々より申付置外、漫ニ不可加之候、向後茂人により可申付之候、尤於此義人数并知行高之定無之事（b）



一、自分ニ召仕候与力相果候者、其代召置候義ハ最前  
申付候子細によるべく候条面々自分ニ召仕候与力  
之様子相考、来夏帰城以後可達聰事 (c)

一、高之内三之三之事ハ侍中之一類右ニ如記与力願之  
者之内、人指を以可申付事 (d)

一、定置明知之分ハ与力千石以上十分一たるへき事  
(e)

一、自分ニ聞立召置候知行高三ノ一并明知十分一之積、  
委細別紙を以申渡候事

御印

三月廿六日

先ず史料二の年代であるが、この御定には後述するが「三ノ一与力」についての定が含まれている。前田五左衛門の与力願<sup>(45)</sup>には「(父)七郎兵衛死去仕、私へ被仰付、則右与力直ニ御預被成候、何茂三ノ一願知之御定以前被召出候者共御座候」と記されている。寄親が亡くなり代替り時に与力は改められることは先述したが、寄親前田七郎兵衛が亡くなったのは寛文九年(一六六九)、五左衛門は「右与力直ニ御預被成」とあることから改めて同じ与力が附けられ

たことになる。この時が「三ノ一願知之御定以前」であった。また、今枝民部の与力願<sup>(46)</sup>中に「(坂田)故新兵衛義、三ノ一願知之御定御座候後、願知之内百五十石明知御座候故、与力ニ奉願、貞享二年被召出」と記されている。これらのことから、寛文九年以降貞享二年(一六八五)以前の巳年であり、「巳三月廿六日」の御定の年代は延宝五年(一六七七)といえる。

さて、御定は九項に分けて記されているが、(a)の傍線部は、与力知の三分の一以下であれば、寄親の存寄で与力を決めても良いとしている。これが後に「三ノ一与力」「三ノ一願与力」「願与力」と呼ばれる与力である。三ノ一の余については(d)に、与力知の三分の二は寄親の「存寄」ではない与力が藩から付けられることが記され、これが「三之ニ与力」や「差与力」等と呼ばれる与力である。これは先述した万治二年の御定にあつた明組の解消を更に進め、また明知の増加をもたらすものであつた<sup>(47)</sup>。(b)(c)の「自分ニ召仕候与力」は、「自分仕与力」のことで「自分与力」や「仕与力」とも呼ばれた。

いずれも寄親附与力についての定であり、利常期において「自分仕与力」以外の与力について、実態として寄親が替わる与力の存在を確認していたが、綱紀は与力知の割合

により「三ノ一与力」と「三之ニ与力」とし、ここに至り寄親与力が三種に整備されたのである。それらの違いは、①「自分仕与力」と②「三ノ一与力」は寄親が与力となる者を指名でき、③「三之ニ与力（差与力）」は藩が与力知が明いている寄親につけた与力となる。また、①は寄親の家臣同様に勤め、②③は藩の役を勤める与力である。特に自分仕与力については、与力知の範囲であれば人数や知行の制限はないとしている。

利常期では自分仕与力を抱える寄親の範囲は人持層まで存在していたが、綱紀の整備を経た寛延三年（一七五〇）与力侍帳では、八家の一部、長・前田（長種系）・奥村（本家）・村井の四家のみとなっており、文化四年（一八〇七）の帳秘藩臣録でも同じ四家のみであった。この点について、富田治部左衛門重持が自分仕与力を願出たときの経緯中に、「然処万治三年之頃、私不限自分仕候寄親人々御吟味有之、其以後自分与力差上可然旨、御老中御差図之由、其頃与力裁許中ヨリ申聞、大形自分与力指上候様寛申候」<sup>(48)</sup>と記している。万治三年（一六六〇）頃に自分仕与力を抱えている寄親の吟味があり、その時ほとんどが自分仕与力を指上げられたのである。つまり、万治三年頃に自分仕与力を抱えられる寄親を大きく制限した上で、延宝五年の御定が出

されたのである。なお、同史料には「私義ハ御用茂被仰付候間、可被得御内意之由」、つまり藩の御用を勤めているとの理由で富田重持は自分仕与力を許されている。穿って考えれば、藩の重要な御用を勤める寄親の補助をする与力が自分仕与力であったともいえる。また、自分仕与力と三ノ一与力については、寄親により代々与力となる家や陪臣から選ばれた場合、与力になる以前は陪臣として主家に仕えていることが考えられる<sup>(49)</sup>。

### 本組与力の成立と展開

延宝五年（一六七七）寄親与力を整備した綱紀は、天和二年（一六八二）には新たな与力を以下のように定めた。

#### 【史料三】

##### 覚

一、跡式之事、兄弟多は三、四拾石又五、六拾石充令配分、与力可召出事 （a）

一、右之通二候者、或四、五拾石、或六、七拾石新二加領可申付事 （b）

一、此輩常之与力とは品替、昵近並ニ跡式無相違申付、知行直判ニ而可遣候事 （c）

附、知行免品之事は惣与力並可為一步下免事

一、大方ハ無組付可指置候へとも、又時二より人持・組頭・物頭之与力ニも指加可申事

一、平生召仕候品は惣与力と別儀在之間敷事

以上

御家中小身者之跡目二男三男高知少、御配分与力知御加被為成、与力ニ被仰付儀、結構成被仰出、委細奉承知、於私共難有仕合奉存候、以上

天和二年十二月廿一日

組頭中

前田佐渡殿

奥村老岐殿

奥村伊予殿

史料三<sup>(50)</sup>は、綱紀の規定を年寄衆が組頭中に達し、組頭が年寄宛てに出した御請の写しである。(a)(b)については、例えば三〇〇石の平土家に三人の男子が居た場合、親の知行を嫡子二〇〇石、二男五〇石、三男五〇石に配分し、嫡子は二〇〇石の平土に、二男・三男には藩から五〇石加領しそれぞれ一〇〇石与力として召し出すことを記している。そしてこの与力について、(c)では「常之与力」とは品替、昵近並ニ跡式無相違申付」としている。「常之与力」とはこれまでの経緯から寄親附与力であり、それとは異な

り平土と同じように家督相続が認められた新しい与力であることを示したのである。先述した与力分類では本組与力のことであり、(a)(b)も併せると湯浅祇庸が示した七品の与力の一つ、「加領本組与力」のことで「加領与力」とも称される与力である。但し、家督相続以外はこれまでの与力と変わらないことも記されている。

このような与力が天和二年に創出され、引き続き大島誠右衛門・多田六之丞・多田権七郎・青木又太郎・河地冲右衛門がその与力として召し出されたのである。そして、その「本組与力」という称号については「乙丑十月七日」に奥村伊予から不破彦三宛ての書状に「御家中侍中跡目之内、次三男親知行分之内少々御指加、明知之内足被下、与力被仰付候人々称号之義、(中略)本組与力、両訓通用候間、弼本組之名目能可有之旨、御錠之由」と記されており、藩主綱紀が「本組与力」と決めたのは乙丑の年、貞享二年(一六八五)であった<sup>(51)</sup>。両訓については「もとくみ」と「ほんぐみ」で、「もとくみ」は「元は平土組」の意を指し、「ほんぐみ」はこれまでの与力の上位に位置付けた与力の意として理解すべきであろうか、定かではない。

綱紀が天和二年に新たに創出した「本組与力」は加領与力であり、彼らが当初の本組与力であり、加領知について

は与力知の明知から足すことが記されている<sup>(52)</sup>。そして、貞享三年（一六八六）には加領与力とは異なった形で本組与力となる道筋が始まったことが「袖裏雜記」<sup>(53)</sup>に記されている。

#### 【史料四】

当地娘方ニ付置候局せかれ、去年内々申聞せ呼寄置候、本組与力ニ召出可申候間、次郎右衛門・新七内召寄内意之趣恭方へ申遣、其上ニ而局江茂申渡候様ニ可被申合候、来十五日目見可申付候、左候ハバ続目之礼仕候、与力ノ次ニ出之可然候、以上

九月十三日

猶以、本組与力と申事、娘儀ハ不案内ニて可有之候之間、昵近と大形同事之様子申聞尤候、以上

ここには、藩主の姫の世話をする「局」（年寄女中）の倅を本組与力に召し出すことが記されている。本稿では以降女中系本組与力と表記するが、その本組与力について「昵近と大形同事」と評している。寄親附与力とは異なり平士と同じであるのは相続の点であることから、家督相続可能か否かは同じ与力であっても大きな違いであり、本組与力に召し出されることは限りなく平士に近い取り立てと認識

されていたようである。

綱紀は天和二年加領与力の本組与力を創出し、貞享三年には女中系の本組与力も加わることになったが、それぞれを「先祖由緒帳并一類附帳」・「諸士系譜」から可能な範囲で事例を集め<sup>(54)</sup>傾向を確認する。

表3は加領本組与力について、与力となった年号、石高（配分＋加領）およびその後の状況等をまとめた表である。これによると分家により加領本組与力家が成立した年代が天和二年（一六八二）から宝永六年（一七〇九）であり、綱紀の時期に限られていることが確認できる。つまり、綱紀期において何らかの課題を解決するため分家・加領し平士と変わらない家督相続を認めた本組与力を創出したものと考えられる。

このことについては改作法に伴った一国平均免導入による高免藩士の減収問題の解消が参考となる。高禄の藩士、三万石の横山家について平士家の分家や加増で対応したことが「被仰出之品等拔書」<sup>(55)</sup>に記されている。横山家の家督相続に際し、「平均高直シ余分四千四百石余有之候間、幸四千石大膳へ加増申付候、残る四百石余、是を五百石ニ引足権八郎へ可申付候」としている。これを由緒帳<sup>(56)</sup>で確認すると、父横山左衛門（忠次、二万七千石）には嫡子大

表3 加領与力一覧

初代人名	続柄	年号	西暦	石高(配分+加領)	その後	出典
青木又太郎	二男	天和2年	1682	100石(50+50)	本組与力(幕末)	㊟「青木多聞」
多田六之丞	二男	天和2年	1682	100石(50+50)	本家嗣(平士)	㊟「多田綱之介」
多田権七郎	三男	天和2年	1682	100石(50+50)		㊟「多田綱之介」
大島浅右衛門	二男	(天和2年)	1682	(50+「加領与力」)		「諸士系譜」
河地冲右衛門	二男	(天和2年)	1682	(30+「加領与力」)		「諸士系譜」
吉見小市郎	二男	(天和2年)	1682	(30+「加領与力」)	本家嗣(平士)	「諸士系譜」
遠田半丞	二男	(天和3年)	1683	(50+「加領与力」)		「諸士系譜」
遠田吟八郎	三男	(天和3年)	1683	(50+「加領与力」)		「諸士系譜」
片岡又十郎	二男	貞享元年	1684	100石(50+50)	本家嗣(平士)	㊟「片岡理光」
国府百助	二男	貞享3年	1686	100石(50+50)	本家嗣(平士)	㊟「国府数馬」
山田忠三郎	二男	貞享4年	1687	80石(50+30)		㊟「山田半内」
山田喜八郎	三男	貞享4年	1687	80石(50+30)	本家嗣(平士)	㊟「山田半内」
横地勘左衛門	二男	貞享4年	1687	100石(50+50)	本組与力130石(幕末)	㊟「山田善左衛門」
中村源八郎	二男	元禄3年	1690	120石(50+70)	本家嗣(平士)	㊟「中村栄三郎」
井上権太郎	末子	元禄4年	1691	100石(50+50)	本組与力130石(幕末)	㊟「井上盛重」
佐久間平八郎	三男	元禄5年	1692	100石(50+50)	本組与力(幕末)	㊟「佐久間錦吉」
佐久間貞右衛門	四男	元禄5年	1692			㊟「佐久間錦吉」
笠間五大夫	三男	(元禄5年)	1692	110石(66余+43余)	享和年間組外140石	「諸士系譜」
半田市大夫	二男	(元禄5年)	1692	(50+「加領与力」)		「諸士系譜」
半田金丞	三男	(元禄5年)	1692	(50+「加領与力」)		「諸士系譜」
木村行右衛門	二男	元禄6年	1693	100石(50+50)	本家嗣(平士)	㊟「木村梨麿」
近藤冲右衛門	二男	元禄6年	1693	100石(50+50)	本組与力(幕末)	㊟「近藤久太郎」
堀 十郎左衛門	二男	元禄6年	1693	100石(50+50)	安永年中退転	㊟「堀 成一」
山口小七郎	三男	元禄7年	1694	100石(50+50)	本家嗣(平士)	㊟「山口藤三郎」
板坂弥三丞	二男	元禄9年	1696	100石(50+50)	天保2年組外	㊟「板坂道雄」
大塚惣右衛門	二男	元禄9年	1696	100石(50+50)	「子無断絶」	㊟「大塚八十八」
兼松基助	二男	(元禄9年)	1696	100石(50+50)	本家嗣(平士)	「諸士系譜」
小林吉大夫	三男	元禄12年	1699	100石(50+50)	本組与力(幕末)	㊟「小林恒衛」
山田善左衛門	二男	(元禄12年)	1699	100石(50+50)		「諸士系譜」
前波和兵衛	二男	元禄13年	1700	80石(50+30)	本家嗣(平士)	㊟「前波和作」
山崎兵左衛門	二男	元禄14年	1701	100石(50+50)	宝暦5年130石組外	㊟「山崎阿三郎」
久世弥市大夫	二男	宝永元年	1704	120石(70+50)	本組与力180石(幕末)	㊟「久世伝三郎」
石野新左衛門	二男	(宝永元年)	1704	「50石加領与力」	「被召上」	「諸士系譜」
大脇伴丞	二男	宝永2年	1705	100石(50+50)	本家嗣(平士)	㊟「大脇直政」
大脇弥三左衛門	三男	宝永2年	1705	100石(50+50)		㊟「大脇直政」
神戸七郎左衛門	二男	宝永6年	1709	100石(50+50)	本組与力(幕末)	㊟「神戸盛徳」
神戸八郎左衛門	三男	宝永6年	1709			㊟「神戸盛徳」

※㊟は「先祖由緒并一類附帳」(加越能文庫 16. 31-65 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵)  
「諸士系譜」(郷土資料 090-836 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵)  
なお、出典が「諸士系譜」の場合、年号は父の没年を( )で記した。

膳(玄位)とその弟権八郎(任風)がおり、権八郎は延宝五年(一六七七)に新知千石で召し出されていた。延宝七年父左衛門が亡くなり、嫡子大膳に二万六千石、弟に千石配分(合二千石)された。その後延宝九年に兄大膳に四千石加増され三万石に、弟権八郎に五百石加増され二千五百石になった。この延宝九年の加増分が「平均高直シ余分」減収問題の解消法であった。また、一万石の本多図書家の成立も「元禄十四年七月図書父安房守隠居、せかれ主殿江

家督相続之節、知行高五万石之免除分七千七百四十八石三斗二貳百五拾壹石七斗引足、合而八千石加増知<sup>(57)</sup>と記されている。つまり、家督相続の際にこれまでの実収高と平均免による実収高の差を平均免による本高に換算し<sup>(58)</sup>、それを分家等の石高にしたのである。加領本組与力の創設は、時期的・家督相続時・分家・加領(増)等の共通点が多いことから、一国平均免導入による減収問題の解消方法の一つであつたと考えられる。

なお、加領本組与力はその成立の経緯により享保期以降は新たな家が出現するわけではなく、実態として幕末まで存続する家もあるが基本的には減少していくことになる。減少の理由は断絶もあるが、組外(平土)への昇格、そして加領本組与力であるが故に本家(平土家)を嗣いだ嫡子(兄)の早世または無子に伴う本家相続者となることにより、加領本組与力が消滅しているのである。そしてこの時、加領分のみならず親の遺知から配分された知行高も合わせて召上となつている<sup>(59)</sup>。

次に女中系本組与力についてまとめたものが表4である。女中系本組与力は加領与力のような特別な呼称はない。藩主家の奥を仕切っていた年寄女中等がその功績により、養子を迎え、その養子に新知を与え本組与力家として成立し

た家である。そして勤めを終えた年寄女中は下宿(奥から出)し、その家で老後養われていくのである。

加領本組与力とは異なり女中系本組与力は元禄・慶応期まで家が成立している。由緒帳に記された女中の経歴では、当初は明確ではないが姫附年寄女中とは限らず、藩主幼少期附年寄女中、また、少ないながら若年寄や若年寄格の女中までもが養子を認められ本組与力家が成立している。この点は藩主家奥での功績、藩主との関係により左右されるものと考えられる。そのため、功績のあつた年寄女中＝本組与力家とは限らず、年寄女中岸野の養子弥次右衛門は元禄元年(一六八八)新知三〇〇石の平土家<sup>(60)</sup>、年寄女中鶴見の養子山脇愛之助は文化八年(一八一二)新知二〇〇石の平土家<sup>(61)</sup>となつている。

その他、石高については享保期までは一五〇石以上、宝暦期以降は一二〇石以下で天明期以降はほぼ一〇〇石に統一されている。また、子孫が自身の功績により組外(平土)となり本組与力ではなくなる家も確認できる点は加領本組与力と同じである。

なお、特別事例として元禄・享保期には加領与力でも女中系与力でもない本組与力家が成立している。一つは、寛文五年(一六六五)幕府から封を解かれ加賀藩に預けられ

表4 女中系本組与力一覧

初代人名	女中名	種	年号	西暦	石高	その後	出典
沢崎半七	高津	年寄女中	元禄元年	1688	300石	文化8年 <b>組外</b> 330石	㊟「沢崎竹雀」
江上知左衛門	菊野	年寄女中	(元禄?)		200石		「諸士系譜」
服部彦右衛門	瀧野	年寄女中	(元禄?)		150石		「諸士系譜」佐久間
鈴木知右衛門	菊野	年寄女中	宝永元年	1704	200石	宝永3年250石 弘化3年 <b>組外</b>	㊟「鈴木藤一郎」
中村弥左衛門	中村	年寄女中	享保5年	1720	150石	天明5年 <b>組外</b>	㊟「中村小太郎」
久世与三兵衛	宮崎	年寄女中	享保9年	1724	150石	本組与力(幕末)100石	㊟「久世新三」
奥村半平	長美	年寄女中	享保12年	1727	150石	本組与力(幕末)180石	㊟「奥村安」
松田平大夫	穂積	年寄女中	享保12年	1727	150石	安政4年 <b>正院馬廻</b>	㊟「松田平作」
本橋甚八	本橋	年寄女中	享保17年	1732	150石	文化12年180石 文政6年 <b>組外</b>	㊟「本橋仙六」
桑島三左衛門	桑野	年寄女中	宝暦11年	1761	120石	本組与力(幕末)	㊟「桑島方友」
相坂源左衛門	八十世	年寄女中	宝暦11年	1761	100石	安政元年 <b>輪島馬廻</b> 200石	㊟「相坂復吉」
藤田久右衛門	藤田	年寄女中	明和9年	1772	120石	本組与力(幕末)	㊟「藤田武吉」
山田庄兵衛	幾田	年寄女中	明和9年	1772	120石	本組与力(幕末)	㊟「山田唯三」
新清大夫	中野	年寄女中	天明4年	1784	100石	本組与力(幕末)	㊟「新右門」
村井作平	三島	年寄女中	寛政元年	1789	100石	本組与力(幕末)	㊟「村井作太郎」
青山八郎兵衛	八重田	年寄女中	享和3年	1803	100石	本組与力(幕末)130石	㊟「青山鉦吉」
小笠原祖山	明昌院	年寄女中格	文化元年	1804	100石	安政□年 <b>組外</b> 130石→150石	㊟「小笠原恒三」
大高庄次郎	元橋	年寄女中	文化4年	1807	100石	本組与力(幕末)130石	㊟「大高可輔」
青木伊太郎	岡野	年寄女中	文化5年	1808	100石	本組与力(幕末)	㊟「青木古次郎」
山口忠藏	聚海	若年寄格	文政元年	1818	100石	本組与力(幕末)	㊟「山口七平」
児井錠五郎	中野	年寄女中	文政12年	1829	100石	本組与力(幕末)	㊟「児井児一」
小谷左守	波江	若年寄	天保10年	1839	100石	本組与力(幕末)	㊟「小谷権太郎」
斎藤森之丞	森園	年寄女中格	嘉永4年	1851	100石	本組与力(幕末)	㊟「斎藤直吉」
藤江和三郎	藤江	年寄女中	嘉永5年	1852	100石	本組与力(幕末)80石	㊟「藤江外男」
菊井順平	菊井	年寄女中	安政4年	1857	100石	本組与力(幕末)	㊟「菊井順平」
敷津林平	敷津	年寄女中	万延元年	1860	100石	本組与力(幕末)	㊟「敷津林平」
牧野才三郎	牧野	若年寄格	慶応2年	1866	90石	本組与力(幕末)	㊟「牧野才三郎」
山梨易司	沖津	年寄女中	慶応3年	1867	100石	本組与力(幕末)	㊟「山梨易司」

※㊟は「先祖由緒并一類附帳」(加越能文庫 16. 31-65 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵)

「諸士系譜」(郷土資料 090-836 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵)

た伊予西条藩主一柳監物(二五〇〇石)の家臣斎藤陽治郎<sup>(62)</sup>と崎市市三郎・貞之進<sup>(63)</sup>である。三人とも一柳監物が元禄一五年になくなった時に本組与力二〇〇石で召し出され、斎藤家は安政三年(一八五六)組外二三〇石に、崎市市三郎家は文化元年組外二三〇石となり、安政三年には三三〇石までになったが、弟貞之進家は「乱心断絶」している。享保期の事例は千羽津大夫<sup>(64)</sup>と山形助之進<sup>(65)</sup>で、両者とも居間方坊主から、綱紀の目に適ったのか「髮立」を許され歩となり、近習として綱紀に仕えていた。綱紀が享保九年(一七二四)に亡くなり、遺骸が金沢に運ばれたときも両者ともに「御尊骸御供」しており、そのような綱紀との関係から同年本組与力一三〇石で藩主を嗣いだ吉徳から召し出されたのである。山形家は幕末まで本組与力一三〇石であったが、千羽津大夫は八年後の享保一七年には組外(平士)となり、幕末には三五〇石の家となっている。前者の一柳監

物家臣は特殊事例であるが、二〇〇石は当時の女中系本組  
与力の石高の範囲であり、千羽・山形は女中系本組与力の  
男性版とする見方も可能であろう。

### 遠所附与力の転換

遠所附与力について、利常期では別宮附与力や魚津附与  
力も寄親附与力で勤めさせていたことを述べた。別宮附与  
力と境附与力については経緯は不明であるが、寛文一一年  
(一六七一)の侍帳<sup>(66)</sup>の時点で既に寄親附与力ではな  
く、なっていることが確認できる。

今石動与力石原所左衛門の由緒<sup>(67)</sup>によると、元禄二年  
(一六八九)今石動支配篠島豊前の与力が欠け、御用が滞っ  
たので「私御指与力ニ被仰付、石動へ引越申候、追付豊前  
与力ニ被仰出、式十五ヶ年相勤」たと記している。篠島家  
は天正以来代々今石動の支配を任された人持で、ここでの  
篠島豊前は四代目である。石原は指与力として篠島豊前の  
与力となっており、寄親附与力の「三之ニ与力」  
として今石動与力となつたのである。その後豊前没後、嫡  
子主馬が今石動等支配を命ぜられるまでの間「私共仲間四  
人、当分仮勤被仰付」られ、更に主馬の没後「跡役未御自  
分様へ不被仰付候内、私共四人仕相勤申候」と記している。

寄親で今石動支配でもある篠島豊前・主馬が不在でも勤を  
果たしていることが確認できる。また、「御自分様」はこの  
由緒書の宛所である塩川安左衛門で、知行六〇〇石の平土  
頭分、宝永七年(一七一〇)に大組頭から今石動等支配と  
なっている。安左衛門は平士であり、与力四人を抱える与  
力知は与えられておらず、石原等四人の与力はこの時から  
寄親附与力ではなくなつたと考えられる。魚津在住は、今  
石動支配よりも早く人持から平士頭分が勤めるようになる。  
知行八〇〇石の永原治兵衛は元禄一〇年持簡頭から魚津在  
住となる。治兵衛は元禄一二年に魚津馬廻荒尾平左衛門の  
三男荒尾又大夫を「私組与力召抱候様奉伺候」と願ひ出て  
いる<sup>(68)</sup>。平士が新たに与力を願っていることから寄親附  
与力ではないことは明らかである。

その後、魚津在住も今石動支配も再び人持がその役を勤  
めることになる。寛延三年(一七五〇)の与力侍帳では、  
人持前田源五左衛門が今石動等支配であるが、源五左衛門  
の寄親附与力鏑木清大夫は御台所御用加人、山内吉郎兵衛  
は寺社方取次定役并明知代官兼役といずれも藩の役を勤め  
ている。寄親附与力とは別の「前田源五左衛門組附」与力  
五人が今石動御用を勤めていることから、平士頭分が勤め  
るようになって以降は、与力知を持つ人持が就任しても寄



親附与力ではなくなつたのである。なお、ここでの「組与力」や「組附与力」は魚津在住や今石動支配に属する与力の意であつて、弓足輕組や鉄炮足輕組に附いた、いわゆる「組附与力」とは異なるが、寄親附与力が勤めない点は別宮附・境附与力も含めて共通している。

### 吉徳期以降の与力

これまで綱紀の与力整備について述べたが、その中には本組与力から組外（平士）となる事例が確認できた。特別事例として綱紀の居間方坊主から本組与力となつた千羽津大夫は享保一七年（一七三二）に組外になるが、これが初期の事例と考えられる。加領・女中系の本組与力から平士となる事例は少ないが、寄親附や組附・明組与力（その他与力）から功績により本組与力になつた家では、その後平士となる事例が一定量確認できる。表5はそれらをまとめたものである。

まず、与力から本組与力となつた初期の事例は元禄一六年（一七〇三）の池田源丞である。池田家はその後天明五年（一七八五）に組外となるが、それ以前に与力家が享保期に組外となる事例が数例確認できる。しかし、由緒帳等には「本組与力」の記載は確認できない。省略であるのか、

この時期は未だ、与力↓本組与力↓平士という道筋が定着していないのかは明確ではない。ともかく与力↓本組与力の道筋については享保一〇年代からは明らかに確認できる。また、与力↓平士の事例としては大田弥左衛門の享保五年が管見の限り最も古いが<sup>(69)</sup>、本組与力↓平士の道筋定着も享保一〇年代からその可能性があると考えられる。

いずれにしても与力↓本組与力↓平士の道筋において、本組与力となる前は寄親附与力であつた彼らの前身は陪臣である場合が多いことは前述したが、これは、陪臣から平士となることができる道筋ができたともいえる。

吉徳期以降は幕末まで大きな変化は確認できないが、慶応期にこれまでは異なる本組与力家が成立する。それまで与力となることのなかつた料理人・細工者・大工頭のうち、慶応元年（一八六五）と三年に本組与力となつた者をまとめたものが表6である。この表の料理人・細工者は先代までに料理頭や細工者小頭等を勤め知行取りとなつていた家で、これまでは同様に料理頭や細工者小頭等になるか、もしくは数代知行取が続いた時は組外（平士）になる場合<sup>(70)</sup>もあった。ところがそうはならず本組与力となつたのである。

料理頭や細工者小頭を本組与力としたのであれば、平士

表5 与力から本組与力一覧

初代人名	前 身	年号	西暦	石高	その後	出 典
辰巳甚五左衛門	寄親附300石	(元禄12年)		(330石)	元文3年組外(幕末)130石	㊟「辰巳六十郎」
池田源丞	組附100石	元禄16年	1703	120石	天明5年組外	㊟「池田喜久馬」
大田弥左衛門	与力100石				享保5年組外130石	「諸士系譜」
明石源藏	寄親附150石				享保15年組外180石	㊟「明石源太郎」
寺西弥八郎	城附150石				享保12年組外180石	㊟「寺西多宮」
玉川七兵衛	寄親附100石	(享保5年)		(150石)	享保17年組外180石(幕末)400石	㊟「玉川孤源太」
中村平八郎	寄親附100石	享保12年	1727	130石	文久3年組外	㊟「中村平八郎」
小原弥藤次	組附100石	享保13年	1728	130石	本組与力(幕末)160石	㊟「小原吉太郎」
野尻知左衛門	寄親附100石	享保17年	1732	150石	天明5年組外、文化8年200石	㊟「野尻与三郎」
南 丹右衛門	明組150石	元文6年	1741	150石	天明5年組外、嘉永元年組外	㊟「南 清五郎」
行山清八郎	寄親附150石	寛保元年	1741	150石	寛保3年組外	㊟「行山詠」
加藤甚五大夫	寄親附				明和4年組外	「諸士系譜」
岩田弥五左衛門	与力	(宝暦初年)		120石	天明5年組外	㊟「岩田彦吉」「諸士系譜」
酒井少兵衛	寄親附100石				天明5年組外	「諸士系譜」
水野金大夫	(父)寄親附100石	宝暦9年	1759	120石	本組与力(幕末)	㊟「水野金太」
関 和 大 夫	寄親附150石	宝暦14年	1764	150石	本組与力(幕末)	㊟「関 兵次郎」
前田武平次	寄親附150石	明和4年	1767	150石	本組与力(幕末)210石	㊟「前田規矩馬」
斎田九郎大夫	寄親附150石	天明5年	1785	150石	本組与力(幕末)	㊟「斎田九平」
島田佐左衛門	寄親附100石	天明5年	1785	100石	本組与力(幕末)130石	㊟「島田盛男」
早川嘉大夫	寄親附150石	天明5年	1785	150石	本組与力(幕末)180石	㊟「早川涉」
村井才兵衛	寄親附150石	寛政3年	1791	150石	本組与力(幕末)	㊟「村井雷一郎」
金丸孫八郎	寄親附200石	文化8年	1811	200石	本組与力(幕末)	㊟「金丸忠四郎」
中西惣兵衛	寄親附130石	文化10年	1813	130石	本組与力(幕末)160石	㊟「中西又三郎」
福村久左衛門	寄親附150石	文化10年	1813	150石	本組与力(幕末)	㊟「福村昌藏」
榊原武兵衛	寄親附150石	文政元年	1818	150石	安政3年小松馬廻180石	㊟「榊原三郎平」
生山佐兵衛	寄親附160石	文政2年	1819	160石	文政6年組外	㊟「生山頼太郎」
蔭山式左衛門	寄親附100石	文政2年	1819	100石	文政9年組外	㊟「蔭山正英」
山本助三	寄親附130石	文政2年	1819	130石	天保13年160石、弘化5年組外	㊟「山本仙六」
篠井元右衛門	寄親附150石	文政4年	1821	150石	本組与力(幕末)	㊟「篠井定馬」
平野知大夫	寄親附180石	文政9年	1826	180石	天保8年組外	㊟「平野仙次郎」
上条弥右衛門	明組100石	天保8年	1837	100石	弘化元年130石、安政4年組外	㊟「上条弥太郎」
松沢伝左衛門	明組150石	天保10年	1839	150石	本組与力(幕末)	㊟「松沢理平」
近藤瀬左衛門	寄親附180石	天保12年	1841	180石	嘉永3年組外、慶応2年280石	㊟「近藤鉄次郎」
福岡権作	寄親附150石	天保14年	1843	150石	本組与力(幕末)180石	㊟「朝倉権作」
坂井権五郎	寄親附160石	弘化3年	1846	160石	嘉永4年組外	㊟「坂井伊太」
秋山平佑	寄親附100石	嘉永元年	1848	130石	本組与力(幕末)	㊟「秋山平三」
音地左大夫	寄親附200石	嘉永3年	1850	200石	安政4年組外	㊟「音地左盛」
原 宅右衛門	寄親附130石	安政3年	1856	130石	文久元年組外	㊟「辻 宅市」
早川浅之丞	明組180石	安政3年	1856	180石	万延元年組外	㊟「早川嘉兵衛」
三田村佐七郎	寄親附130石	文久元年	1861	130石	本組与力(幕末)	㊟「三田村新七」
井口誠太郎	寄親附180石	文久4年	1864	180石	本組与力(幕末)	㊟「井口義平」
武田清左衛門	寄親附130石	慶応元年	1865	130石	本組与力(幕末)	㊟「武田清休」
内藤謙左衛門	寄親附150石	慶応元年	1865	150石	慶応4年町同心	㊟「内藤謙」
小松三次郎	正院附150石	慶応2年	1866	150石	本組与力(幕末)	㊟「小松繁」
鈴木辰右衛門	寄親附180石	慶応2年	1866	180石	本組与力(幕末)	㊟「鈴木辰与聞」
玉川豊左衛門	寄親附150石	慶応3年	1867	150石	本組与力(幕末)	㊟「玉川小豊太」
吉川平太	明組130石	慶応4年	1868	130石	本組与力(幕末)	㊟「吉川平太」

※㊟は「先祖由緒并一類附帳」(加越能文庫 16. 31-65 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵)

「諸士系譜」(郷土資料 090-836 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵)

年号・石高の( )は推定である。

なる。しかし、本組与力となつて以後の勤方について、料理人・細工者では長谷川織人と沢野右内は記していないが、その他は全て与力としての勤、特に「異国船手当」・「京都守衛」・「正院附」等藩政末期の特徴的な勤も多く記されて

表6 歩並等から本組与力一覧

人 名	前 身	年 号	石 高	出 典
長谷川織人	料理人	慶応元年	110石	㊟「荒木伝八」
石黒勇作	料理人	慶応元年	80石→100石	㊟「石黒信生」
舟木伝内	料理人	慶応元年	100石	㊟「舟木伝内」
小沢庄蔵	料理人	慶応元年	100石	㊟「小沢庄三」
山崎久	料理人	慶応元年	100石	㊟「山崎久」
沢野右内	料理人	慶応元年	70石	㊟「沢野右内」
不島源五右衛門	細工者	慶応元年	80石	㊟「不島統」
神戸保十郎	細工者	慶応元年	80石	㊟「神戸五十郎」
若林吉平	細工者	慶応元年	80石	㊟「若林吉平」
平野五兵衛	細工者	慶応元年	60石	㊟「平野啓」
清水誠六	大工頭	慶応3年	50俵→100石	㊟「清水誠六」
清水多四郎	大工頭	慶応3年	70俵→100石	㊟「清水多四郎」
中村半左衛門	大工頭	慶応3年	70俵→100石	㊟「中村半次」
田島津平	御歩横目	慶応3年	50俵→100石	㊟「田島津平」

※㊟は「先祖由緒并一類附帳」（加越能文庫 16. 31-65 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵）

一步手前の状況を本組与力に統一したことになる、これまで平士になるはずだった家を本組与力にしたのである。平士への道筋を厳しくしたことに

いる。「正院附」については、従来人持や頭分が勤めた魚津在住や今石動在住の勤が、幕末の情勢により、能登に天保一四年（一八四三）所口在住、嘉永七年（一八五四）には輪島在住、正院在住が新たに加えられた。現地では人持・馬廻組の他に実務を執る与力が、従来の魚津附与力や今石動附与力と同様に「正院附」等として配されたのである。これらのことから幕末には与力の需要が増えたことは十分に考えられ、当時の与力不足の解消を狙い歩並からも与力になる道筋を開いた可能性が高いと考えるべきであろう。

一方大工頭はこれまでは頭となつても俵取のままで、数代大工頭を勤めようとも平士は勿論与力にもなることはなかった。それが本組与力となり、さらには清水多四郎と中村半左衛門は平士の奉行職である外作事奉行を勤めるのである。また、定番歩であった田島津平は嘉永五年に作事所附御歩横目となり、慶応三年本組与力となるが、大工頭であった清水・中村と同様外作事奉行を勤めるのである。作事所附御歩横目の時の勤方が認められたのであるが、これらは平士の奉行に専門職系や実務職系の奉行も入れたことになる。

一方で専門職を実務職へ、一方で管理的な奉行に専門・実務職を入れるなど相反するように見えるが、算用者が対

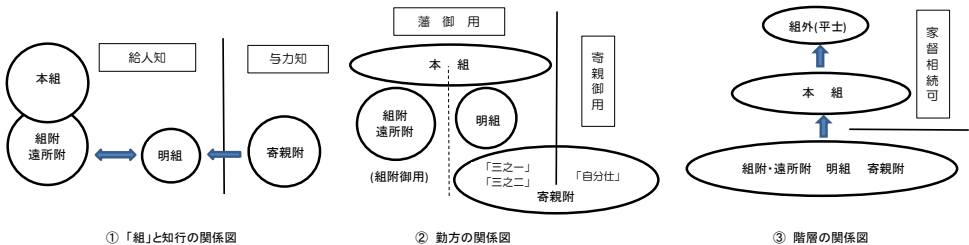
象に入らず料理人・細工者が対象となっていることから藩政末期の时期的な要請により与力を増加させる方向に動いたと考えられる。

## おわりに

加賀藩の与力は、一〇〇〇一五〇石知行取りの下級武士で、上位層の平士や下位層の歩・足輕に挟まれながら彼らよりも少数層であった。利長以前はともかく、三代利常は与力知を大身に付け陪臣や平士を寄親附与力とし、平士より下位層で実務を行う藩士を創出したのである。そして五代綱紀の与力整備過程で本組与力等新たな形態の与力も生まれたのである。寛文七年（一六六七）には小立野に与力町を整備し拝領屋敷を与え集住もさせている。そして享保期以降は他の与力から本組与力、また本組与力から平士への道筋が確実となっていくのである。そのような各与力の関係について本稿で述べたことを図示すると以下のようになる。様々な要素が複合し、一図で示すことができないところに与力理解の困難さを認識させられる。

ところで、綱紀は与力をどのように認識していたのだろうか。杉江伝兵衛が与力を永く勤め、年長となった倅との指替わりを寄親が願った時に、綱紀は「久々相勤候者共、

いまた戦場之奉公可成内、其身不願ニ知行上させ候と申義、有之間敷事候」<sup>(71)</sup>と記している。与力は「戦場之奉公」できる内、つまり体が動く間には与力として働かせ続けるべきだ、との認識である。平士の勤方は様々な理由を付け「御免」となることはあっても、与力は許されないものである。そのため与力は永く勤めることが一つの評価基準となり、「数十年人情ニ相勤」等の文言を伴い知行引足や本組与力に、さらには平士となる事例が多い<sup>(72)</sup>。また、「公事場附御用定役」や「江戸御武具裁許定役」等「定役」が



各与力関係概念図

付く勤方も多く、これは平士の勤方にはない文言である。

「定役」の定義は難しいが勤に精通していることは想像に難くない。さらに「関屋長大元組附与力」や「前波故和兵衛跡組附与力」の「元組附」や「跡組附」は大組頭や持弓頭不在時も組を差配していたことを示している<sup>(73)</sup>。

以上、本稿では与力の基礎的な存在形態について検討してきた。与力の勤方については今後の課題としたい。与力の勤方の範囲は広く個別研究にならざるを得ないが、藩政の実務において、永く勤め、精通し、頭や奉行が不在でも藩の業務は滞らせず、臨時的な勤にも対応した与力の実態解明が、加賀藩における官僚制を明確にするものと考えている。

## 注

- (1) 江森一郎「小立野与力町（金沢市）与力の家系研究」『金沢学院大学紀要』文学・美術・社会学編第八・九号 二〇一〇・二〇一一年。なお、加賀藩の与力についての先行研究としては、横山方子「加賀藩の与力と与力町」『金沢大学文化財学研究』第五号 二〇〇三年）がある。

- (2) 梅田康夫「金沢藩の公事場与力について」『立命館法學』二〇一〇年五・六号。

- (3) 「起止録」（中村石蘭亭文庫三八・二七）二 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵）。以下、金沢市立玉川図書館近世史料館は近世史料館と略す。

- (4) 「諸頭系譜」（郷土資料〇九〇・八五）近世史料館蔵）。なお、翻刻は『諸頭系譜』上・下（平成二五年・二七年 近世史料館）。

- (5) 拙稿「加賀藩における平士頭分と役料」『北陸史学』第六五号 二〇一六年。

- (6) 前掲注（4）。

- (7) 前掲注（4）。

- (8) 「先祖由緒并一類附帳」神原至善（加越能文庫一六・三二一六 近世史料館）。なお、江戸時代は神原ではなく沖津家。寛永一六年から明治二年まで別宮附与力である。

- (9) 「惣与力人数知行高并明知役付歳付等之帳」（加越能文庫一六・三〇一九六 近世史料館）。以降本稿では「寛延三年与力侍帳」と表記する。

- (10) 「第一節 藩士の身分と格式」（『金沢市史』通史編2「第二章 武士の身分と奉公」二〇〇五年）。

- (11) 富田景周「帳秘藩臣録」（加越能文庫一六・三〇一五〇 近世史料館）。なお、翻刻は『加賀藩侍帳 上』（金沢市図書館叢書一一 平成二九年 近世史料館）に所収。

- (12) 前掲注(9)。
- (13) 「土帳」(加越能文庫一六・三〇—五四 近世史料館)。
- (14) 前掲注(10)。
- (15) 一国平均免は改作法の過程で、それ以前においては村毎に異なる免での収入のため、藩士が同石高でも実収が所附により異なっていたが、加賀・能登・越中における石高に対して、藩士が実収できる免率を一定にすることにより実収差を解消したものである。加賀は三ツ六歩、越中・能登四ツ一歩で、所附では石高を加賀と越中・能登に分け、実収が約四割になるようにしている。
- (16) 湯浅祇庸「北藩秘鑑」卷之六 (加越能文庫一六・三二—四四 近世史料館)。なお、翻刻は「国格類聚『金沢市史』(資料編四 近世二 二〇〇一年 金沢市)に所収。
- (17) 「六冊之御定書」④(加越能文庫一六・二三—二三④ 近世史料館)。
- (18) 湯浅祇庸「北藩秘鑑」卷之七 前掲注(16) 参照。
- (19) 湯浅祇庸「藩国官職通考」(加越能文庫一六・二六—近世史料館)。なお、翻刻は『藩国官職通考』(石川県図書館協会一九七〇年)がある。「藩国官職通考」は文化九年に加賀藩の各役職について、その来歴等をまとめたもの。
- (20) 「与力知行村附」(加越能文庫一六・三〇—二〇 近世史料館)。

- 寄親附与力竹下判兵衛(三〇〇石)の正徳五年の所附で、寺社奉行菊池大学・伊藤内膳・永原左京から寄親である村井主膳宛てに出されている。
- (21) 湯浅祇庸「北藩秘鑑」卷之六・卷之七。前掲注(16) 参照。
- (22) 湯浅祇庸「北藩秘鑑」卷之六。跡目に關して「一、本組与力者三品同様被仰付、其外寄親附・組附等者父為代被召抱(中略)是等者三ノ一与申儀も無之」とある。
- (23) 史料により区別されていない場合もあるが、区別して「引足」とある場合は、本組与力を除いた与力以下の石取り藩士の石高を増やす場合に用いられている。
- (24) 「与力本末略考」(加越能文庫一六・三一—五七 近世史料館)。
- (25) 前掲注(9)。
- (26) 前掲注(13)。
- (27) 「同心老卷覚書」(加越能文庫一六・二六—八三 近世史料館) および「与力同心留記」(加越能文庫一六・二七—一〇二 近世史料館)。なお、同心知も与力知と同じく一歩は寄親の収入となる。
- (28) 前掲注(11) 『加賀藩侍帳 上』362頁。
- (29) 『加賀藩史料』12編805頁。
- (30) 「与力方御親翰等之控」(加越能文庫一六・二六—八〇 近世史料館)。

なお、本章における事例や史料引用については、別史料註等がない限りは、この史料からの引用である。

(31) 「慶長三年の侍帳」(「村井重頼覚書」加越能文庫一六・二二三一 近世史料館) の奥村河内守(二万石)の箇所には「此内弓衆四十人ノ大将」と記載されている。

(32) 「先祖由緒并一類附帳」赤座大八(加越能文庫一六・三二一六五 近世史料館)。

(33) 「先祖由緒并一類附帳」奥野武隆(加越能文庫一六・三二一六五 近世史料館)。

(34) 「前田光高知行宛行状」(前田大膳家文書 近世史料館寄託史料)。

(35) 「与力預置状」(前田大膳家文書 近世史料館寄託史料)。

(36) 「先祖由緒并一類附帳」奥村則友(加越能文庫一六・三二一六五 近世史料館)。

(37) 「先祖由緒并一類附帳」今枝弥平次(加越能文庫一六・三二一六五 近世史料館)。

(38) 奥村伊予守の寄親附与力荒木五大夫は寄親に対する不行状により召放となるが、その時伊予守は「与力之義、尤公用ハ相勤候得共、畢竟寄親奉願与力知之内を以被仰付義御座候得者、家来同事ニ相心得可申処」と述べている(前掲注(30))。

(39) 日置謙『加能郷土辞彙』昭和一七年 金沢文化協会。

(40) 「第三節 前田利常・光高と加賀藩政」(『金沢市史』通史編 2 「第一章 加賀藩政の成立」二〇〇五年)。

(41) 石野友康「加賀藩における貞享の職制改革について」『加能地域史』三二(二〇〇〇年)、林亮太「加賀藩上級家臣団の職掌と職名の変化について―貞享三年の職制改革後を対象として―」『地方史研究』三六二(二〇一三年)。

(42) 「被仰出之品等拔書」(加越能文庫一六・二五一一 近世史料館)。

(43) 前掲注(17)。

(44) 「与力御定等」(加越能文庫一六・二七一九九 近世史料館)。

(45) 前掲注(30)。

(46) 前掲注(30)。

(47) 「三之二与力」が寄親ではなく、藩から与力を附けるため明組の解消となる一方、「三之二与力」を附けない場合は、与力知の三分の二が明知となる。万治二年の御定では与力知一〇〇石以上の場合十分の一を明知とする規定であったが、延宝五年の御定により更に明知化が進むことになる。結果として寛延三年では与力知の明知は五割を超している(表2参照)。

(48) 「富田治部左衛門与力之内自分仕度旨奉願」(「卷奇帳」(加越能文庫一六・二六八一一 近世史料館)。

(49) 奥村伊予守家の自分仕与力坪井家の場合は代々与力となる

前は陪臣一〇〇石、与力となった後は一五〇石で奥村家の勤めを果たしている（加越能文庫「先祖由緒井一類附帳」坪井吉三郎 近世史料館）。三ノ一与力の場合は藩の勤をする与力のため、陪臣時の勤を由緒帳には記していないため確認は難しいが、陪臣の場合は親子とも主家に仕えることが多いことから、与力になる前に陪臣として主家に仕えることは想像に難くない。

(50) 前掲注 (17)。

(51) 前掲注 (17)。

(52) 前章では、与力知明知以外でも本組与力等の知行は賄えることを指摘したが、加領本組与力の加領分は明知から、遺知分は明知以外から出されることになる。この状況がいつまで続いたのかは明確ではない。

(53) 「袖裏雜記」（加越能文庫一六・二八二〇② 近世史料館）。

(54) 「先祖由緒井一類附帳」（加越能文庫一六・三二一六五 近世史料館）。

津田信成「諸士系譜」（郷土資料〇九〇一八三六 近世史料館）。「諸士系譜」は直臣が中心の系譜であり、「先祖由緒井一類附帳」は全てが残っているわけではないうえに、八家から陪臣足輕まで幅広い階層のものが混在している。しかも与力は本組与力を経て平士となる場合があるため全てを抽出すること

は現状ではできない。

(55) 前掲注 (42)。なお、近藤磐雄『加賀松雲公』明治四二年）上巻第一章第三節「免相の平均」で同史料を引用して説明している。

(56) 「先祖由緒井一類附帳」横山三郎（加越能文庫一六・三二一六五 近世史料館）。

(57) 「先祖由緒井一類附帳」本多貞五郎（加越能文庫一六・三二一六五 近世史料館）。

(58) 例えば、知行高一万石で免五ツ（五割）の村を領していた藩士の実収高は五千石で、一国平均免が導入され免四ツとなると実収高四千石となり、その差千石を免四ツの知行高に逆算すると二千五百石の知行高となる。

(59) 養子等により別家を相続した場合は以前の知行等は指除となる事例が多く見られる。それと同扱いと考えるべきか。なお、前掲注 (55)・(56) の横山家の場合、次男権八郎（新知一〇〇〇石＋親の配分一〇〇〇石＋加増五〇〇石）は兄の早世に伴い本家三万石を相続した際には自身の知行と合わせて三二五〇〇石となったが、次代には三万石のみ相続となり、結果的に二五〇〇石は召し上げられている。直接比較はできないが、八家ですら親の配分を召し上げられている。

(60) 「先祖由緒井一類附帳」田尻一貫（加越能文庫一六・三二一



六五 近世史料館。

(61) 「先祖由緒并一類附帳」 山脇保三郎 (加越能文庫一六・三一・

六五 近世史料館)。

(62) 「先祖由緒并一類附帳」 斎藤又八 (加越能文庫一六・三一・

六五 近世史料館)。

(63) 「先祖由緒并一類附帳」 崎田一平 (加越能文庫一六・三一・

六五 近世史料館)。

(64) 「先祖由緒并一類附帳」 千羽種菊 (加越能文庫一六・三一・

六五 近世史料館)。

(65) 「先祖由緒并一類附帳」 山形善太郎 (加越能文庫一六・三一・

六五 近世史料館)。

(66) 「寛文十一年侍帳」 『加賀藩初期の侍帳』 石川県図書館協会

一九七〇年)。

(67) 前掲注 (30)。

(68) 前掲注 (30)。

(69) 与力以外から平士になった事例では元禄一三年に新番歩並から新知一五〇石奥小将となった松尾治部がいる。治部は綱紀の居間方坊主であったが元禄六年名字を松尾とし同一〇年新番歩並となり、同一三年新知一五〇石奥小将、その後加増を重ね宝永二年には五五〇石、更に同七年には使番 (頭分) となり、加増・頭分としての昇格を続け、享保九年には石高

九〇〇石となり馬廻頭を勤めるまでに至っている。

「先祖由緒并一類附帳」 松尾平九郎 (加越能文庫一六・三一・

六五 近世史料館)。

(70) 「先祖由緒并一類附帳」 大杉義門・内田耕平 (加越能文庫一

六・三一・六五 近世史料館)。慶応期以前の事例として、大杉

家は料理頭 (並) を三代続け、その三代目の義平は小松馬廻

(平士) となっている。大田 (内田) 家は細工者小頭を二代

続け、その二代目清兵衛は組外となっている。このような事

例は御歩小頭や算用者小頭等にも見られる。

(71) 前掲注 (30)。

(72) 表3く5における加越能文庫の「先祖由緒并一類附帳」。

(73) 前掲注 (9)。